

# ペトルス・ヨハニス・オリヴィ 『第三任意討論集』

## 第四問題 試訳

石田 隆太

### 1 凡例

- ・訳出にあたっては次のものを底本とした。  
PETRUS IOHANNIS OLIVI, *Quodlibeta quinque: Ad fidem codicum nunc primum edita cum introductione historico-critica*, ed. S. DEFRAIA, Roma: Editiones Collegii S. Bonaventurae, 2002. ※Defraia と略記。
- ・訳者自身による訳文中の [ ] は訳者による補い部分であり、〔 〕 は原語の引用部分である。また Defraia にはないものとして、各段落の冒頭に番号を付した。
- ・指示語および指示語を含む語句に関しては、必要に応じて指示内容を明確化して訳出するようにした。また省略されていると思われる文言については、[ ] を付さずに補った箇所がある。

### 2 はじめに

本稿では、13世紀後半に活躍したスコラ学者ペトルス・ヨハニス・オリヴィ（1248年頃～1298年）<sup>1</sup>による『第三任意討論集』（1289年～1292年）<sup>2</sup>の中から、第四問題「同じ種の諸個体は実体に即して異なるのか、それとも附帯性のみによって異なるのか」を取りあげて訳出を試みる。『第三任意討論集』冒頭にある目録によれば、この任意討論集では十三の問題が扱われ、一つは神について、七つは諸事物の諸本性（*naturae rerum*）について、五つは道徳的なことについてである（Defraia, 169, 3–4）。われわれが取りあげる第四問題は二番目の問題群に属している。

この二番目の問題群は次の通りである（Defraia, 169, 6–16）。①「関係は、関係がそれにおいて基礎づけられるところのものとは実在的に異なる何かを付加するのか否か」（第二問題）；②「質料の可能態は、それが属する本質と本質によって同じであるのか否か」（第三問題）<sup>3</sup>；③「同じ種の諸個体は実在に即して異なるのか、それとも附帯性

<sup>1</sup> オリヴィの生没年に関しては例えば次を見よ：BURR, D., “The Persecution of Peter Olivi,” *Transactions of the American Philosophical Society* 66/5, 1976, 5.

<sup>2</sup> 『任意討論集』の第一から第三までの著述年代については次を参考にした：PIRON, S., “Franciscan *Quodlibeta* in Southern *Studia* and at Paris, 1280–1300,” in SCHABEL, Ch. (ed.), *Theological Quodlibeta in the Middle Ages: The Thirteenth Century*, Leiden – Boston: Brill, 2006, 415–16; Defraia, XIII–XIV; 125\*–26\*.

<sup>3</sup> 第三問題の本文では「質料の可能態は、それが属する質料と本質によって同じであるのか否か」

のみによって異なるのか」(第四問題)；④「任意の類において、その類の内のあらゆるものの尺度である最小の同一のものは何か」(第五問題)<sup>4</sup>；⑤「空気の同じ部分に存している、相異なる光体の光線は、区別された存在をその場合に持つのか否か」(第六問題)；⑥「二つの物体が同じ場所に同時に存在することができるのか否か」(第七問題)；⑦「人間知性は一つの形象によって、種によって相異なる複数のものをそれらがそれらである限りで知解することができるのか否か」(第八問題)<sup>5</sup>。オリヴィ自身が「諸事物の諸本性」に関わると言っているこれらの問題を大まかに区別するなら、この目録を見る限り、形而上学的なもの(①、②、③)、論理的なもの(④)、自然学的なもの(⑤、⑥)、認識論に属するもの(⑦)に分類することができるだろう。ただし⑥に関しては、「この問題は諸物体の本性のみならず、栄光に満ちた身体の栄光[*gloria corporis gloriosi*]や神の超自然的能力にも関わる」と言われており、神学にとっても重要な問題であることが明言される。この点は、われわれがこれから見ることになる第四問題にも共通している。第四問題末尾でもまさに、復活前と復活後の身体という事例が諸個体の区別という問題を考えるために使われている(Defraia, 180, 129-131)。事物の個体性ないし一性を考える上で復活というキリスト教的な教義が関わってくることはスコラ学において一般的に見られることであり、スコラ学的な源泉としてはペトルス・ロンバルドゥスの『命題集』第四卷第四十四区分が重要である<sup>6</sup>。したがってこれらの問題群は、個別の領域に関わる問題として読み解くことができるものであるのみならず、スコラ学者なりの問題意識(ここでは特に神学的関心)を結果として表すものでもある。われわれが以下で見ることになる第四問題に限定して言うなら、この世界に存在する諸個体の相異はどのようなものであるのかという形而上学的な問いかけは、この問題に対する一つの解答パターンを与えてくれるものであるだけではなく、そのように問うスコラ学者自身の問題意識をも示してくれるものである。個体の問題をこのように、問題にとって内在的な視点からだけではなくて外在的な視点からも捉えること、すなわち、その問題を問う者自身が何のためにそれを問うているのかという観点からも再認識することのできる一つの事例として、この第四問題を訳出することにした。これは哲学の問題であると同時に、思想研究全般に関わることであろう。

最後に、この第四問題の内容を概観しておくことにしよう。オリヴィは、まず1において、同じ種の諸個体が実体に即して異なるのかそれとも附帯性のみによって異なるのかという選択肢を提示した上で、2では片方に属する意見を提示する。それは、諸個体は実体に即して異なるという意見であり、その根拠は、質料が実体に即した区別の基準であるということである。それに対して3では、附帯性の一つである量によってのみ諸個体は区別されるという意見が提示される。そして彼は、4において自分の立場は基本

(Defraia, 175, 4-5) となっている。

<sup>4</sup> 第五問題の本文では「任意の類において、その類の内のあらゆるものの尺度である最小の同一のものは何か。すなわち、それは最も特殊な種[*species specialissima*]であるのか否か」(Defraia, 180, 5-7)となっている。

<sup>5</sup> 第八問題の本文では「人間知性は一つの形象によって、種に即して複数のものをそれらがそれらである限りで知解することができるのか否か」(Defraia, 192, 5-6)となっている。

<sup>6</sup> KÖHLER, Th. W., *Der Begriff der Einheit und ihr ontologisches Prinzip nach dem Sentenzenkommentar des Jakob von Metz O.P.*, Roma: «I. B. C» Libreria Herder, 1971, 361-475.

的に前者の側であることを明言した後に、諸個体が実体に即して異なることの証明を5から9において展開する。証明は大別すると五通りある。第一に5では、第一実体ないし担い手という概念そのものに基づいて証明が示される。第二に6では、附帯性に着目して証明が示され、その証明がさらに四通りある。一つ目は附帯性一般および基体一般に、二つ目は個別的附帯性および個別的基体に、三つ目は本質一般および個の本質に、四つ目は別様性と他者性に基づいている。第三に7では、個性性という概念そのものに基づいて証明が示される。第四に8では、個性性を附帯性だと仮定する帰謬法の論理が用いられている。第五に9では、類や種に基づいて証明が示される。

次にオリヴィは、10において、2で示した意見に全面的に賛成するわけではないことを述べ始める。彼が問題視するのは、諸個体の相異なる所以が質料にのみ求められるということである。そして11に至ってオリヴィは、ここでの主題である個体化の問題をめぐる議論状況について言及すると同時に、このことについては既に、ペトルス・ロンバルドゥスの『命題集』に対する問題集（およびその基になった講義など）において詳細に論じたことをほのめかす。そのほのめかされたと思われる箇所では、個体化の問題をめぐる状況が「無限な森（*silva infinita*）」であるという有名な言葉を残している<sup>7</sup>。そのため、この任意討論では詳細には立ち入らない旨が宣言されている。

最後にオリヴィは、12から26にかけて、附帯性である量のみによって諸個体の相異を説明する意見を様々な観点から批判していく。13以降において大別すると三つの観点から批判が行われていく。第一に14以降では、質料に伴う量が附帯性であることに基づいて批判が示され、この第一の批判はさらに七通り数えることができる。一つ目は14で示されており、他者性と別様性に着目している。二つ目(15)は端的な存在と何かに即した存在に、三つ目(16)は現実態においてあることに、四つ目(17)は運動に基づいている。五つ目は、まず18において、量が質料に受容される際、受容する質料が数的に一でも複数でもないという可能性が示され、そのことの不都合が三つ示される。一つ目(19)は《*aliquid*》に、二つ目(20)は複数の質料および質料の複数の部分に、三つ目(21)は普遍的質料と個別的質料および単純な質料と単純でない質料に基づいている。22ではより大きな分類の六つ目として濃密なものが引き合いに出される。最後に七つ目(23)は切り分けや連続化が着目される。24では一番大きな分類の第二の批判として、質料の量と質料の本質が全く別物であることが示される。25では第三の批判として、同じ種の下にある諸々の量が複数化されることが引き合いに出される。最後に26においては、量のみによる実体の複数化を唱える意見が危険であり馬鹿げたものでもあることが明言され、その理由を説明する中で、先ほども言及した身体の復活の事例が取りあげられている。

以上の概観に基づくなら、この第四問題でオリヴィは、自身の「スンマ」である『「命題集」問題集』の並行箇所ほどには詳細な記述ではないものの、そのエッセンスをこの第四問題において示していると言える。この第四問題においても様々な諸論拠の森を見ることにはなるが、個体化の問題による「無限な森」の道しるべの一つとして、以下に試訳を示すことにしたい。なお、この第四問題の現代語訳は、管見の限りでは未だ存在

<sup>7</sup> PETRUS IOHANNIS OLIVI, *Quaestiones in secundum librum Sententiarum*, q. 12 (ed. B. JANSEN, vol. I, Quaracchi: Typographia Collegii S. Bonaventurae, 1922, p. 213).

しないと思われる。

### 3 試訳

#### 第三任意討論集

##### 第四問題

同じ種の諸個体は実体に即して異なるのか、それとも附帯性のみによって異なるのか

1. 第四に、同じ種の諸個体は実体に即して異なるのか、それとも附帯性のみによって異なるのかが問題とされる。

2. そして、実体に即して異なると思われる。その理由は次の通りである。諸個体は質料に即して異なる。しかるに、質料は実体〔*substantia*〕である。なぜなら、アリストテレスが『魂について』第七で<sup>8</sup>、実体を質料にも複合体にも分けているからである。〔それゆえ、諸個体は実体に即して異なる。〕

3. これに反対する。アリストテレスが『自然学』で言うには、実体が数に即して複数のものへと可分的であるのは、ただ量に即してのみである<sup>9</sup>。〔それゆえ、諸個体は附帯性の一つである量によってのみ異なる。〕

4. 以下のことが言われるべきである。諸個体は実体に即して異なるが、無論のこと諸々の相異なる種差によって異なるのではない。なぜなら、その場合に諸個体は種的に

<sup>8</sup> アリストテレス『魂について』第2巻第1章412a6-9「ところでわれわれは、本質存在（まさにあるもの）をある（存在する）もののうちの一つの（類）であると語っているが、その本質存在を、一方では素材——それ自体としては〈ある・これなるもの〉ではないもの——の意味で、他方ではそれとは異なり形態、すなわち形相——それによって素材がただちに〈ある・これなるもの〉と語られるもの——の意味で語り、そして第三にはこの二つのものが結合されたものという意味で語りもする」（中畑正志＝訳、『魂について』、『アリストテレス全集』、第7巻、中畑正志、坂下浩司、木原志乃＝訳、岩波書店、2014年、64頁）；第2章414a14-16「本質存在（まさにあるもの）は三通りの意味で語られるのであり、そのうちの一つは形相、もう一つは素材、そしてもう一つは両者から成る結合体である」（同、74頁）。中畑訳で「本質存在」と訳されているギリシア語は《*οὐσία*》であり、これがオリヴィの著述におけるラテン語《*substantia*》（実体）に対応していると思われる。それゆえ、アリストテレスの原文を踏まえて、ラテン語の《*diuidit substantiam et materiam et compositum*》（Defraia, 176, 7-8）は「実体と質料と複合体を分けている」ではなくて「実体を質料にも複合体にも分けている」と訳すことにした。すなわちこの場合、オリヴィの著述では「形相」のことが省かれていると理解することになる。

<sup>9</sup> アリストテレス『自然学』第1巻第2章185a32-b5「ところでメリッソスはあるものを「無限」と述べている。とすれば、あるものはどれだけかの量であるということになる。「無限」は量のうちに入るものであり、他方、基本存在が無限であるとか、性質や情態が無限であるということは、付帯的にというのでなければ、すなわちそれらのものでありつつ同時に何らかの量でもありうるというのでなければ、成り立たないことだからである。なぜなら「無限」の定義には量ということが用いられるが、基本存在や性質ということは用いられてはいないからである。そこで、もしあるものが基本存在であるだけだとすれば、それは無限ではありえず、そもそもいかなる大きさも持ちえないことになろう。何らかの大きさを持つ場合、それは何らかの量だということになるからである」（内山勝利＝訳、『自然学』、『アリストテレス全集』、第4巻、内山勝利＝訳、岩波書店、2017年、24-25頁）。内山訳では《*οὐσία*》が「基本存在」と訳されている（cf. 同、25頁、註16）。

異なるからである。

5. さて、諸個体は実体に即して異なるということが目下のところ証明される。第一に、第一実体ないし担い手 [suppositum] の理拠 [ratio] そのものに基づいて証明される。すなわち次の通りである。実体の担い手は、担い手である限りにおいて、実体である。それゆえ、相異なる担い手として異なるものは何であれ、相異なる実体として異なる。大前提 [すなわち、実体の担い手は、担い手である限りにおいて、実体であるということ] が明らかなのは次の通りだからである。担い手は、担い手である限りにおいて、[何か] を担い、そしてそれ自体で存し<sup>10</sup>、いかなるものにも受容されないがあらゆるものにおいて基底に立ち [substare]、そしてあらゆるものを自らにおいて受容し安定化させる。担い手はまた、担い手である限りにおいて、位置のある実体 [posita substantia] <sup>11</sup> と同じものである。そして何ものも固有には、担い手であるか担い手において局限されたものであるかでない限り、現実態にあることはできない。

6. さらに、担い手は、担い手である限りにおいて、附帯性全体そのものを意味する。これは存在者全体そのものではなくて、ただ存在者全体の内の何かである。そしてこれは部分としてではなくて附帯性としてある。[以上を踏まえた第二の証明として] 附帯性の側から、諸個体が実体に即して異なるということが第一には次のように証明される。すなわち次の通りである。あらゆる附帯性は、自らの基体から存在を受け容れるか、あるいは少なくとも自らの基体において存在を受け容れる。それゆえ基体は、自らのあらゆる附帯性よりも本性的により先にある。しかるに、基体が自らのあらゆる附帯性よりも本性的により先にありうるのは、それが本性的により先に自らにおいて一なるものである場合のみである。なぜなら、どんな事物であれ存在することができるのは、それが数において一なるものである場合のみだからである。さらには [第二に]、次のように証明される。個別的附帯性は一なる個別的基体においてのみ受容されうる。それゆえ、より先に、基体がそれ自体で一なるものでなければならぬ。さらには [第三に]、次のように証明される。附帯性が基体の本質を変容させるのではない。しかるに、本質の最高の相異化とは、一方の本質が他方の本質とは端的に別のものであるということである。そして確かなことには、二個体は二つの個の本質 [essentia individualis] を持ち、それらの内の一方は他方のものとは別の本質である。さらには [第四に]、次のように証明される。諸附帯性の相異性は別様性 [alteritas] をもたらすだけで他者性 [alietas] をもたらさない<sup>12</sup>。

<sup>10</sup> Defraia では《est per existens》(177, 17) となっている箇所を《et est per se existens》と読み替えることにした。

<sup>11</sup> アリストテレス『分析論後書』第1巻第27章 87a36 「「単位」は「位置のない実在」であり、「点」は「位置ある実在」である」(高橋久一郎=訳、「分析論後書」、『アリストテレス全集』、第2巻、今井知正、河谷淳、高橋久一郎=訳、岩波書店、2014年、436頁)。高橋訳で「位置ある実在」と訳されているものが《posita substantia》のことだと思われる。このことについては次も見よ：Kolbinger, F., *Zeit und Ewigkeit: Philosophisch-theologische Beiträge Bonaventuras zum Diskurs des 13. Jahrhunderts um tempus und aevum*, Berlin: Walter de Gruyter, 2014, p. 235; pp. 235–236, note 151.

<sup>12</sup> Cf. ポルピュリオス『エイサゴージェ』「差異」の章「一般に、すべて差異は、何かに付け加わるとき、このものを異ならしめるのであるが、しかし一般のおよび特殊な差異は(このものを)別様にすることに対して、最特殊な差異は、種を成す差異(種差)と呼ばれ、他方別様にする差異は、単に差異と呼ばれているのである。例えば「動物」に「理性的」という差異が付け加わると、それを別のものにするが、

7. 第三に、諸個体が実体に即して異なるということが個性〔individuatō〕<sup>13</sup>そのものの側から証明される。すなわち次の通りである。確かなことには、一方の個体の個性は他方の個体の個性とは数において別の個性<sup>14</sup>である。また確かなことには、それらの個性はそれら自身によって相互に異なる。というのも、何かによって所与である諸々の数的一性は、それら自身によってのみ、それらの間で複数のものとして生じるからである。それゆえ、それら自身によって相互に異なるということは、諸々の個性性において所与でありうるのと同じ理由によって、諸々の実体においても所与でありうる。

8. さらに〔第四に〕、もし個性性が附帯性であるなら、附帯性が基体においてあるのと同じようにして個性性は何らかのものにおいてある。しかるに、より先に個体化されていないものとして所与とすることができるのは、種の本性的みである。それゆえ、種の本性はそれ自体に即する限り、それによってまたそれに即して種の本性が個性性に対して基底に立つところのものに即しても個体化されていないことになる。かくして種の本性は、私やあなたにおいて二つの個性性に対して基底に立つ限りでは、実在的に別々のものではなくて、むしろ実在的に同じものであることになる。これは諸々の矛盾に満ちている。

9. さらに〔第五に〕、基体と附帯性からは、一つの類や一つの種に属するような少なくともそれ自体で一なるものは何も生じない。むしろ、基体は一方の類や種に属し、附帯性は他方の類や種に属している。ところで確かなことには、個体、とりわけ〔附帯性ではなく〕実体の個体は、他のあらゆる存在者よりも上位にあって、それ自体で一なるものである。

10. さて、諸個体は質料のみによって異なるわけではないということが知られるべきである。なぜなら、そうだとすると諸個体は、複数の実体形相を〔つまりは一個体につき一つの実体形相を〕持つのではなくて、複数の質料を同一の形相の下で持つだけであることになってしまうからである。また次のように言われることもありえない。諸形相が作出因としての質料によって複数化された結果として、あるいは、質料そのものの数的一性および数的複数性がいわば形相そのものに到達してそれを形相づけた結果とし

---

「動く」という差異が加わると、「静止する」とは違った別様のものにするだけであって、このように、ある差異は別のものにし、他の差異は単に別様にするわけである」(水地宗明=訳、ポルピュリオス、「イサゴーゲー」、『世界の名著』(中公バックス版)、第15巻、田中美知太郎=責任編集、中央公論社、1980年、427頁)。目下の文脈に即してポルピュリオスの文章を理解するなら、「一般的な差異」および「特殊な差異」の基準になるものはいずれも附帯性のことであり、後者の附帯性は固有性と言われることもある。「一般的な差異」の基準となるような附帯性としては「動く」や「静止する」という状態が上では例として挙げられている。「特殊な差異」の基準となるような固有性としては、伝統的には(人間にのみ当てはまるとされる)「笑いうる」(risibile) というものが知られている。なお、ポルピュリオスのこのテキストで言われている内容は、主としてポエティウスによるラテン語訳を介してラテン中世に広まった。トマス・アクィナスにおける受容のあり様については次を見よ：石田隆太、「トマス・アクィナスはポルピュリオスをどう理解していたのか——個体化の原理をめぐる議論を事例として」、『新プラトン主義研究』、第17号、2018年、39頁；47-48頁、註29。

<sup>13</sup> 《individuatō》を「個体化」ではなく「個性」と訳すことについては次も見よ：PICKAVÉ, M., “The Controversy over the Principle of Individuation in *Quodlibeta: a Forest Map*” in SCHABEL, Ch. (ed.), *Theological Quodlibeta in the Middle Ages: The Fourteenth Century*, Leiden – Boston: Brill, 2007, 55–56n126.

<sup>14</sup> Defraia では《alio numero》(177,35) となっている箇所を、内容を考慮して《alia numero》と読み替えることにした。

て、形相が、それによって質料の本質がそれ自体に即する限りは数において一つであるところの一性と同一一性によって存在することになってしまい、また複数の形相の下で形相そのものは数において一つであることになってしまう、と。そして、数において複数の形相がそうであるように、質料の数的複数性による場合も全く同様である。

11. さて、ここで複数のことが言われえたであろうが、目下のところは次のことだけで十分なはずである。すなわち、この主題をめぐって [今] 存在し [かつて] 存在した諸々の誤謬に特有な根元の一つは、[この誤った見解を保持する] 彼らが、一性は、その一性によってないし即して一であるところのものに対して実在的に相異なる何かを付加するというようなことを考えたということである。全く同様に、多数性が多数のものそのものに対して実在的に [相異なる] 何かを付加するということもそうである。以上がどのようにして不可能であるのかは他のところで十分に示された<sup>15</sup>。

12. したがって、実体が数に即して複数のものへと可分的であるのはただ量に即してのみであるということ [すなわち第3段落] に対しては、量について次のことが言われるべきである。そうしたことは端的に偽である。そして多数の重大な誤謬の根元は、非連続の複数性だけについて理解される。とりわけ次のように想定した場合にそうである。量が、諸々の触れ合いの連続性、あるいは、量的な事物であれば何であれその諸部分同士にとっては外にある連続性に加えて、何らかの現実的本質を意味する、と。

13. さて、この根元は目下のところ三つのことに基づいて証明される。

14. 第一にはすなわち、質料の量は彼らによれば附帯性であるということに基づいて証明される。その理由は以下の通りである。このことに即せば [第一に]、二つの量の下に存在する質料は自らにおいては本質のいかなる他者性をも持たず、ただ現実的な別様性だけを持つことになる。

15. また [第二に]、事物は同じものから端的な存在 [esse simpliciter] と端的に一であること [esse unum simpliciter] を保持する。しかるに、質料が附帯形相から受け取るのは端的な存在ではなくて何かに即した存在 [esse secundum quid] だけである。ところで確かなことには、何らかのものどもがそれに即して端的に複数である複数性は、何らかのものどもがそれに即して端的に一である諸々の一性の複数化に起源を持つ。それゆえ、こうした複数性が附帯性に由来することは不可能である。

16. また [第三に]、質料が附帯性の下にありうるのは、質料が実体形相およびその形相的存在 [esse formale] によってより先に本性的に現実態において生じている場合のみである。なぜなら、質料は実体形相によってのみ現実態にありうるからである。さて、質料が何らかの附帯性の下にありうるのは、それがより先に現実態にある場合のみである。しかるに、質料が現実態にありうるのは、それが何らかの数的一性ないし複数性の下にある場合のみである。

17. また [第四に]、様々な運動によって同じ質料が別々の量を受容する。それゆえその質料は、自らの本質に即しては量によって数えられない。

18. また [第五に]、量が質料に受容される [或る] 時に、受容する質料は数において一つか、複数か、あるいはどちらでもないかである。もし一つないし複数なら、その質

<sup>15</sup> オリヴィ『「命題集」第二巻問題集』第12-13問題。

料はその一性および複数性を〔量が受容される前には〕持っていなかった。〔それに対して〕もしどちらでもないなら、少なくとも三つの不都合が帰結する。

19. 第一の不都合は、一でも複数でもない何か〔aliquid〕があるということである。というのも、受容する質料が何かであることは確かだからである。

20. 第二の不都合は、量の相異なる部分が複数の質料に、ないし質料の複数の部分に受容されないということである。なぜなら、受容する質料においては、諸質料の複数性の内の、ないし質料の諸部分の複数性の内のいかなるものもなかったからである。

21. 第三の不都合は、量が普遍的質料に受容され何らの個別的質料にも受容されていないということであり、さらに、量が単純な質料と単純でない質料に同時に受容されているということである。

22. そしてさらには〔第六に〕次のことである。濃密なものにおいては、濃密なものと同等の量を持つ或る一つのものにおいてよりも質料がより多くあるわけではない<sup>16</sup>。

23. そしてさらには〔第七に〕次のことである。本性および本性的運動によって或る一つの部分は複数のものになることができ、複数の部分は切り分けや連続化とは別の仕方一つの部分になることができる。なぜなら、濃密なものが希薄化によってより大きな量を受け取る時、その濃密なものにおいて量の複数の部分があるのと同じだけ質料の複数の部分がそれにおいてはあることになり、希薄なものが濃密化によってより小さい量を受け取る時は反対のことになるからである。

24. 第二にそのことが証明されるのは、彼らによれば質料の量は質料の本質とは全くもって別の本質であるということに基づいてである。その理由は次の通りである。諸本質の一性および複数性は、それ自体で諸本質そのものにおいてあるのでなければならず、他方の本質によって一方の本質においてあるわけではない。無論、諸々の形相的本質が質料の本質に適用されるというまさにこのことによっては、その諸形相の一性もその諸々の形相的存在の一性も、質料の本質に適用される。

25. 第三にそのことが証明されるのは、同じ種の下にある諸々の量の複数化に基づいてである。その理由は次の通りである。確かなことには、二本の線は線の同じ種の下にあり、二つの面は面の同じ種の下にある。そこで私は、〔種としては〕同じ線が何によって個体化および複数化されているのか、すなわち何らかの付加されるものによって個体化および複数化されているのか、それとも〔種として〕同じ線には何も付加されること

<sup>16</sup> 22 および 23 で言及されている「濃密」および「希薄」に関するスコラ学者たちの源泉の一つは、アリストテレスの自然学的な言説であろう。Cf. アリストテレス『自然学』第1巻第4章 187a12-b7；トマス・アクィナス『「自然学」註解』第1巻第8講 (SANCTI THOMAE AQUINATIS, *Opera omnia iussu impensaue Leonis XIII. P. M. edita*, tom. II, Roma: Typographia polyglotta S. c. de propaganda fide, 1884, p. 24a, n. 2) 「さて、〔古代の〕自然哲学者たちが言っていたことには、四元素の内の一つから他のあらゆるものが生成されるのは希薄さと濃密さに即してである。例えば、空気が始原だと措定していた人々は、希薄化された空気からは火が生成される一方で、濃密化された空気からは水が生成されると言っていた。ところで、希薄なものとは濃密なものは相反しており、それらは、より普遍的なものとしては卓越性〔excellētia〕と欠落〔defectus〕に還元される。というのは、濃密なものとは質料を多く持つものである一方で、希薄なものとは質料を僅かしか持たないものだからである」。トマスによれば、四元素の中でも火は、質料性からもっとも免れているがゆえに卓越したものであり、そうした特性が希薄性と重ねられている。それに対して土は、もっとも質料性から逃れられないがゆえに最も欠落したものであり、そうした特性が濃密性と重ねられている。

なく個体化および複数化されているのかを探求するとする。もし何もしないに個体化および複数化されているなら、同じ理由によってこのことは色々な種やそれらの個性性において所与とされるべきであることになる。[それに対して] もし何らかの付加されるものによって個体化および複数化されているなら、その付加されるものは、同じ類および種の内の同じものであるか相異なるものであるかである。

26. なおまた次のことが知られるべきである。或る人々が、質料が諸部分において複数化されうる所以の主要な原因として、それは量によってのみであると措定していることは甚だ危険であり、同様にまた次のこと、すなわちこれの原因は相異性であるということとは著しく馬鹿げている。その理由は次の通りである。彼らが言うことには、それ自体で自らにおいて様々な位置を内包するものだけが、同じ種の下でそれ自体のみ数えられうるものであり、そのものが内に存在している残りのものどもは、数えられうるものであるということとそのものから保持しており、ところでこのものこそ量である。実際、もしこれが真であるなら、同じ位置を持つ人々は誰であれ、少なくとも彼らが同じ種に属する限り、数において同じ本質である。以上と同様にして、栄光に満ちていない身体とともに同じ位置において立つ栄光に満ちた身体は、そうでない身体と数において一つであることになる。あるいは、栄光に満ちた身体について信仰が保持していることは神にとってさえも不可能であると言わなければならないことになる。なぜなら、このことに即する限り、それは明白な矛盾を内包することになるであろうからである。また驚くべきことには、同じ質料において、そして同じ位置の下にある質料とともに存在する、相異なる形相の存在は複数の部分的本質を持つことができない。

(いしだ・りゅうた 日本学術振興会特別研究員 PD (慶應義塾大学文学部))

※本稿は、JSPS 科研費 17J00136 および 18K12191 の助成を受けたものである。翻訳の作成にあたっては、小沢隆之氏 (慶應義塾大学) より数々の有益な助言を頂戴した。この場を借りて最大限の謝意を表したい。